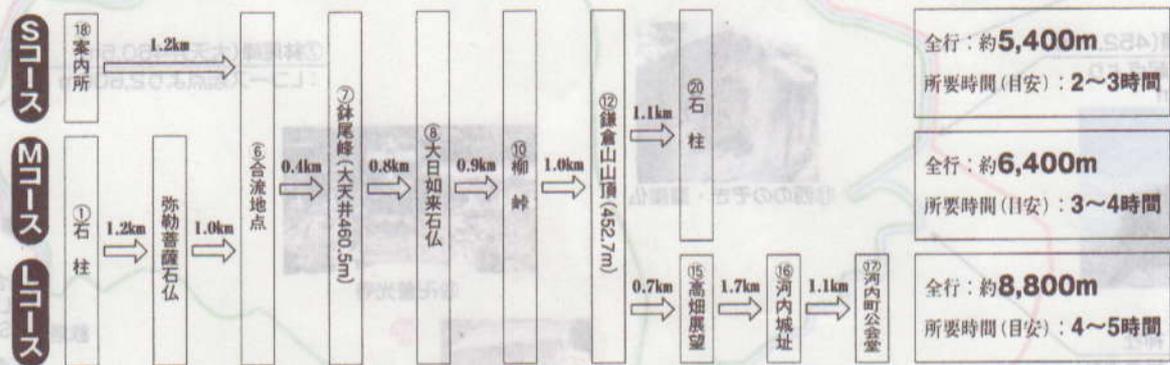


鎌倉山行者道ハイキングコースについて

鎌倉行者道ハイキングコースは、加西市の北部(河内町)に位置し、名刹普光寺を中心に、鎌倉山とその周辺山稜の旧行者道をまわるコースです。

鎌倉山は、大きな磐座をもち、高く美しい姿や近郷一円の水源地であったことから、古くから神々の古里である神体山として、神話や伝説にも数多く登場します。住吉神社(北条町)や佐保神社(社町)の神社記によれば、いずれも鎌倉山から降臨された神と記されています。また、修験道の開祖は役行者とされ、修験道が民衆の生活に深く浸透したのは江戸時代でした。医療の行き届かない農山村では、山伏の祈祷がそれに代わるもので、講を結んでの登山修行は、庶民にとっては大きな娯楽でもありました。近郷でも江戸時代から修験道が盛んになり、明治35年(1902年)、ときの普光寺・明星院住職の蓬萊実隆師のご尽力によって、霊峰鎌倉山に連なる峰々に行者道が開かれ、修験道播磨支局が設置され播磨における修験道の中心となりました。

その後、行者道は荒れていましたが、地元の多くの方々の努力によってハイキングコースとして整備されました。



ハイキングコースは、Lコース(赤線)とMコース(青線)とSコース(緑線)の3コースが設定されています。Lコースは、旧行者道と河内城址を巡るコースで、全行8,800mの健脚向けのコースです。Mコースは、もとの行者道の全行程を巡るコースで、全行6,400mです。Sコースは短縮コースで、全行が5,400mです。

Lコースでは、「是より行者道」の石柱①が基点となっており、文化7年(1810年)に作られた「愛宕神社の石鳥居」②をくぐるといよいよコースが始まります。これからの道中には、釈迦如来⑤・大日如来⑧・孔雀明王⑩など多くの石仏がまつられており、行者道の面影が今もなお残っています。

鳥居からやや進むと「護摩堂」③に到着します。屋根には「播磨支局護摩講」の棟札が見られ、毎年12月には、前の広場で護摩が焚かれていました。なお、創建されたのは寛政8年(1796年)で、現在のお堂は昭和31年(1956年)に再建されたものです。Sコースと合流後⑥、やや進むと「大天井」とも呼ばれる「鉢尾峰」⑦に到着します。鉢尾峰は、丹波路が一望できる戦略の要衝で、中世の山城跡です。「東ののぞき」⑨の磐座には役行者と不動明王がまつられ、修行に使用した鉄鎖が今も残っています。次に多可郡に通じる「柳峠」⑩を過ぎると鎌倉山山頂⑫に到着します。山頂には、法起菩薩像がまつられており、周辺の広場はその昔、護摩を焚いて雨乞いをした場所です。「なお、山頂には双眼鏡も設置されており、美しい播磨平野が一望できます。」遠くは明石大橋や瀬戸大橋も望めます。「西ののぞき」⑬には、目もくらむような岸壁に磨崖仏が刻まれています。また、この岩には、法道仙人が入定された岩洞があり、仙人が入定されて以来、かぐわしい香りを放ち絶えることがなかったことから、「抹香岩」と呼ばれています。

やや引き返して下ると、「宝来山鎌倉寺」⑭があります。寺伝によれば、神亀6年(729年)、中衛大将藤原房前公の御願により、徳道上人の開山とされます。当初のご本尊は、奈良の豊山長谷寺(西国霊場8番札所)のご本尊を彫った有名な仏師が、同じ楠の霊木をもって試し彫りした『十一面観音菩薩像』で「こころみの観音」と呼ばれました。現在の本堂は文化十三年(1816年)に再建されたものです。また、隣の磐座にある「鎌倉神社の祠」には山の神がまつられています。

鎌倉山山頂から南へLコースを進むと河内城址があります。河内城址は通称「城山」にあり、頂上に立てば富家庄はもちろん在田平野を一望できる絶好の場所です。そのまま河内町公会堂まで足を伸ばすと全行8,800mに及ぶLコースも終着です。また、Sコースの基点となっている蓬萊山普光寺⑯は、白雉2年(651年)法道仙人開基と伝わる古刹で、朱の美しい山門やそれにつづく杉並木の木、市指定文化財の宝篋印塔や日本一の大きさとも言われる石灯籠など見所も豊富で、境内に湧く名水を飲みながら、ハイキングの疲れをいやすのには最適の寺院です。